

IIAS NEWSLETTER

2001年3月発行

国際高等研究所

関西文化学術研究都市



国際高等研究所は、「人類の未来と幸福のために何を研究すべきか」を研究することを基本理念として、新たな学問の創造・進展を目指す「課題探索型」の基礎研究を行っています。

すなわち、人類の未来と幸福にとって不可欠な課題を発掘し、その問題解決に向かっての研究戦略を展開する中で、学術研究における新しい研究の萌芽、或いは新たな学問の立ち上げにより広く世界文化の発展に寄与することを目的としています。

目次

課題研究「臨床哲学の可能性」公開セミナー開催報告

一般公開講演会開催報告「万葉の富士山歌」：坂本信幸（奈良女子大学教授）

若手研究者の部屋から

・「国際高等研究所での研究と生活」：セリーヌ・メナージュ（IIAS研究員）

掲示板：受賞報告、今後の予定

課題研究「臨床哲学の可能性」公開セミナー開催報告

課題研究「臨床哲学の可能性」（研究代表者：野家啓一・東北大学教授）の研究成果を一般の人に紹介するために公開セミナーを2000年12月9日、高等研のレクチャ・ホールで開催した。

セミナーでは「臨床の知とは何か」で知られる哲学者の中村雄二郎氏の基調講演や、プロジェクトメンバーのコメントを通して、現実から乖離（かいり）してしまった哲学という学問を、身近な問題を考えることによってとらえ直し、それをツールにして更に社会を問い直す研究が臨床哲学であることをアピールした。

プロジェクトメンバーの鷲田清一・大阪大学大学院教授が「臨床哲学の可能性」をテーマに、臨床哲学の概念とこれからの研究の方向性を示唆した。

一般的には難しいと敬遠されがちである哲学を、現代社会における政治、経済だけでなく、環境、生命操作、介護、いじめ、ジェンダなど人と人の関係、人間の根源にかかわる問題など、具体的な問題から、社会に必要な価値を見だし新しい哲学の試みをしようというものである。

哲学が身近な生活から離れていったのは、20世紀の哲学が言語・意味に執着した結果であり、哲学は言葉で語られた世界しか語らなくなってしまった。ソクラテスやアリストテレスらの時代の哲学は「自然とは何か」「私とは」「生きる意味は」など現実に

かかわる問題をテーマとしてきた。まさに、臨床的な哲学だった。これからの哲学は、大規模災害の現場や混乱している教育現場など社会的な困難が発生している現場に出掛けて行って、そこにいる人たちと共に苦しみながら考えることが求められる。これが、臨床哲学といえる。ギリシャの哲学に先祖帰りするといい。

現代は現実と乖離しすぎた哲学のリハビリが必要な時代で、臨床哲学はまさに、哲学をリハビリすることだと言える。

10年以上も前から「臨床の知」を提唱している中村氏は、西洋哲学が科学的、合理的で説得力がある「北型の知」とするならば、このプロジェクトの臨床哲学は生活感覚に即し、魔法や魔術をも包み込んでしまい、合理性や科学的とは相いれない部分もある「南型の知」といえる。言い換えれば「人間の隠された知」でもある。

そして、臨床哲学は現場主義であり、科学性、合理性を超え、西田幾太郎のいう「行為的直感」やデカルトの「感性の覚醒」とも通じるところがある。まさに「南型の知」を実現することではないのだろうかと思ふと発想の展開を訴えた。



基調講演を受けて、野家研究代表が司会者となり研究プロジェクトメンバーの意見交換を行った。中岡成文・大阪大学大学院教授は80年代後半から「臨床」という冠のついた学問が多くなってきており、臨床哲学も一種の流行になる危惧を表明した。臨床哲学も「知の引きこもり」の一因ともなっているのではないかとし、ソクラテスのストリート・フィロソファ、街の開業哲学者を目指し、哲学をもっと

コモンなものとしていくことが重要だと指摘した。

また、川本隆史・東北大学大学院教授は社会倫理学の立場から、「臨床」という言葉には、メディカルなイメージがあるので、臨床哲学がすべての現在の事象を対象とするのではなく、医療関係、特にケアという面から「看護の知」を搾取する可能性があるのではないかと、臨床哲学の問題点を指摘した。

(文責・事務局)

一般公開講演会開催報告「万葉の富士山歌」

坂本信幸（奈良女子大学教授）

高等研と奈良女子大学の共同研究「歴史的概念としての『日本』の形成と変容」に関わる一般講演会を1月13日、高等研のレクチャーホールで開き、奈良女子大学の坂本信幸教授が「万葉の富士山歌」と題して講演を行った。



富士山は日本を代表する山であり、日本の象徴ともいえる山である。その富士山を古代の日本人はどのように捉えていたのであろうか。私たちは、富士山の歌という直ちに、百人一首で有名な「田子の浦に うち出でて見れば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ」という山部赤人の歌を思い出す。そこには、万年雪をかぶった霊峰としての富士の姿がイメージされる。しかしながら、万葉集の「東歌（あづまうた）」に歌われた古代の庶民の見た富士山は、「天の原 富士の柴山 木の暗の 時ゆつりなば 逢はずかもあらむ（巻14・3355番）」という歌に知られるように、霊峰というより恋人との逢瀬の時を知らせる山であり、生活に密着した山であった。こういった万葉の富士山歌の諸相を眺めるとともに、万葉集の赤人の富士山歌では「田子の浦ゆ うち出でて見れば 真白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける」となっており、新古今和歌集や百人一首の赤人歌と若干の相違を見せることについて、その根本的な相違点はどこにあるのか、といった点についても考察を加えた。

また、この歌が古来名歌とされてきたのはなぜなのか、本当に名歌なのか、といったことについてわかりやすく講演した。

江戸時代の学者であった賀茂真淵は『万葉考』でこの歌を評して、「大かたの人一節を思ひ得て本末をつゞくるぞ常なるを、古へ人は直にいひつらねしぞ多き、そが中に赤人は、ことにふしあるは、いまだしく心ひくき事と思ひけん、かくうち見るさまをそのまゝに言いつゞけたる也。」と述べたが、真淵の赤人歌理解には誤りがあった。その誤りの上に、近代以降、島木赤彦の『万葉集の鑑賞及び其批評』

に見られる「何等の奇なき所が、この歌の大柄にして富士の大きな姿を現し得てゐる所以である。（中略）平凡の如く見える所が、天地自然の心に合してゐる所であつて、この平凡は、平俗を意味する世上の平凡とは違ふ。誦すれば誦するほど、長河の海に朝する如き勢と力とを感ずる。」といったような評価が加えられてきた。

島木赤彦は短歌を1首独立したのものとして鑑賞の対象としているが、万葉集の長反歌は、長歌と反歌で1組のものであり、短歌だけを切り離して鑑賞するのではなく、長歌とセットで鑑賞、理解しなければいけない。

長歌には、冒頭の「天地の分かれし時ゆ」という歌い出しから始まって、富士山の神秘性や時間的な悠久性、空間的な無限性ととともに、その真っ白に冠雪した雄大な姿が「天の原振り放け見れば」という天空を振り仰ぐ表現を中心に描かれている。反歌はそれを受けて、「田子の浦ゆうち出でて見れば」という表現により、富士の見えない田子の浦を通して富士山の見えるところに出た瞬間に見出された、雄大に白雪を被って聳え立つ富士山が詠われているわけで、真淵などがいのように見たままをそのまま詠ったわけではなく、赤人の創意工夫により、富士の見えない空間を設定して、見えない場所から見える場所に「うち出でた」瞬間に立ち現れた富士の美を表現している。

このように、従来の印象批評的な論評でなく、この歌の表現に即した論理的な考察を加えて、その名歌である由縁を説明した。そして、日本の象徴としての富士山の出現について述べた。

若手研究者の部屋から

My work and life in IIAS

「国際高等研究所での研究と生活」

C_line M_nager,セリーヌ・メナージュ (IIAS研究員)



I came to Japan 2 years ago as a scientist to study about neuronal development. A correct morphology (a cell body with 1 axon and several dendrites) is very important for neurons since this morphology leads to their functioning, the propagation of information. Information is integrated via dendrites (short processes of the neuron) and is released via the axon (very long process which can be more than 1 meter long in human adult). However, the mechanism leading to the differentiation to axon or dendrites is mostly unknown. I'm studying about a protein CRMP-2 that is highly expressed in the developing nervous system. This protein is implicated in the axon behaviour but its mode of action and real function is still unclear.

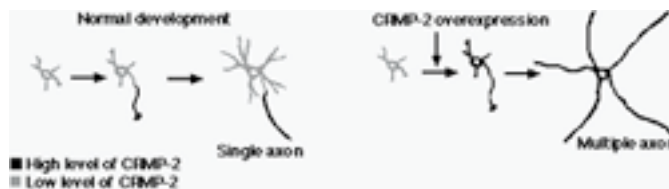
By studying CRMP-2 protein, we found that CRMP-2 was involved in axon formation. An excess of this protein in the neuron leads to an abnormal morphology (several axons instead of only 1). A decrease of this protein will shorten the length of axon or lead to a neuron without axon.

Therefore, in hippocampal neurons, concentrations of functional CRMP-2 in neurites appear to play an important role in axon induction.

Since I came to Japan, I spend much time in working. But I had the chance to find a very nice place to live. IIAS is a very quiet and beautiful place. The first time I came in IIAS was in April,

there were flowers everywhere; those were so beautiful. It is pleasant to live and work there. And I had the chance to find some people who speak French. That's great! We exchange French and Japanese lessons after work. This is very useful for me since my Japanese level is low, every chance to speak Japanese is a great opportunity.

Another thing I like about IIAS is the time when we have a party. Because I have the opportunity to meet IIAS people and to talk to them. As people are very nice, this is always a pleasure to meet them.



私は2年前に神経発生について研究するために日本にやってきました。

神経細胞は1本の軸索と複数の樹状突起という構造により形成されています。神経細胞が正確な形態をとることは非常に重要です。というのもこの形により神経の機能が決まり、また様々な刺激が電気的情報として伝達されるからです。この情報は樹状突起を通して集められ、軸索を通して伝達されます。情報が伝達される経路、つまり軸索は非常に長く、例えばヒトでは1メートル以上にもなります。

しかしながら、この軸索や樹状突起がどのようにしてできてくるのかについてはあまり知られていません。私は神経系が形成される時に多く発現しているCRMP-2という蛋白質について研究を行っています。この蛋白質は軸索の動きに関連していますが、その活性の作用機序や働きについては未だによくわかっていません。CRMP-2の研究により、私達はこの蛋白質が軸索の形成に関わっていることを発見しました。神経細胞においてこの蛋白質を強制的に発現させますと、通常1本である軸索が複数になったりという、異常形態をとりま

す。反対にこの蛋白質の量を減少させますと、軸索の長さが短くなったり、また、全く軸索のない神経細胞になります。

したがって、脳の海馬における神経細胞では機能的なCRMP-2の集中が軸索誘導に大きな役割を果たしているようです。

日本に来てからというもの、ほとんどの時間を研究して過ごしてきましたが、幸い住む場所を見つけるのには恵まれました。高等研はとても静かできれいな場所です。初めて高等研に来たのは4月だったのですが、その頃は辺り一面に花が咲いていてとてもきれいでした。ここで住み研究するということはとても楽しいです。また、フランス語を話す人にも会えてとても良かったです。私達は日本語とフランス語の交換レッスンをしています。日本語があまり上手でない私にとっては、日本語を少しでも話せるこの機会がとても役に立ちます。その他にも高等研主催のパーティも気に入っています。高等研の人達に会って話すことができますし、皆さんいい人達なのでいつも会うのが楽しみです。

(文訳：事務局)

掲示板

受賞報告

平成13年2月2日に齊藤宣一特別研究員が博士論文で井上研究奨励賞を受賞しました。

論文名：『Stokes方程式に対する領域分割法の収束の速さと領域の形状』



今後の予定 (会場は原則として高等研) 2001年3月～2001年4月

月日	プロジェクト名	研究代表者 / 講演者
3月2日(金)	「IIASフェロー研究会」第3回ミニ研究会 「パイ中間子研究会」	山崎敏光 (IIASフェロー / 東京大学名誉教授)
3月3日(土)	「情報市場における近未来の法モデル」研究会 第3回コピーマート応用研究会「ITと出版の近未来像」共催：(社)日本書籍出版協会	北川善太郎 (副所長 / 国際高等研究所副所長)
3月6日(火)	「物質研究における多角的協力の構築」第25回(幹事会) 企画1「工学と物質科学の新しい接点の模索」 「物質・システム」プロジェクト 第7回	金森順次郎 (特別委員 / 大阪大学名誉教授)
3月7日(水)	「物質研究における多角的協力の構築」第26回研究会 企画3「物質開発と理論物理の協力」ミニ研究会	金森順次郎 (特別委員 / 大阪大学名誉教授)
3月24日(土) ～ 4月11日(水)	「情報生物学適塾」集中トレーニングコース	松原謙一 (副所長 / 国際高等研究所副所長)
3月24日(土)	IIASフェロー公開講演会 「21世紀の夢 - 反物質の科学 - へのいざない」	山崎敏光 (IIASフェロー / 東京大学名誉教授)
4月21日(土)	IIASフェロー公開講演会 「不思議なことと不思議でないこと - 太陽系天体の配列を中心として - 」	古在由秀 (IIASフェロー / 国立天文台名誉教授)

お知らせ

2000年度発行の高等研選書は以下のとおりです。

第6巻 『無機イオンと生命 - もう一つの生命』	江橋節郎 著
第7巻 『科学と技術の間』	西島和彦 著
第8巻 『素粒子物理学の100年』	南部陽一郎 著
第9巻 『「関西空港」建設の事後評価』	赤井浩一 著

～ 近刊 ～

第10巻 『地球大気の研究 - 発展の一断面 - 』	加藤進 著	(平成13年3月22日発行予定)
第11巻 『情報社会における著作権とビジネス』	北川善太郎 編	(平成13年3月27日発行予定)
第12巻 『物質(もの)とは何か』	井口洋夫 著	(平成13年3月31日発行予定)

問合せ・申込先：TEL:06-6442-9614 FAX:06-6456-3689

お問い合わせ

国際高等研究所



International Institute for Advanced Studies

編集・発行 / 国際高等研究所

〒619-0225 京都府相楽郡木津町木津川台9-3

TEL: 0774-73-4001 FAX: 0774-73-4005

http://www.iias.or.jp/ e-mail: www_admin@iias.or.jp